弔問歌の形成
―「君」の用法に着目して―

小倉久美子

はじめに

前号で『万葉集』の挽歌に所収される歌と「三代集」の哀傷歌に所収される歌とを比較検討した(一)。結果、両者は詠歌場面という観点からも、死者と詠み人をめぐる人間関係という観点からも異なるものであり、その特徴の一つが弔問歌であるという指摘をした。

従来、弔問歌については贈答歌の一種として知られるのみで、和歌研究においての専論はなく、『和歌文学辞典』などの主要な辞書類にも立項されていない。また、物語研究では『源氏物語』の柏木巻・横笛巻にみえる夕霧による落葉宮邸への訪問が、弔問の作法から次第に求婚の作法へと移り変わっていくことを指摘した研究がみられるが(二)、これもやはり弔問歌そのものについて問うものではない。

こうした弔問歌を検討対象としてほとんど取り上げられてこなかった研究状況のなかで、挽歌・哀傷歌の部立所収歌を比較すると、哀傷歌の部立所収歌にみえる弔問歌が挽歌の部立所収歌にはほとんどみえないという特徴を見出すことができたのである。弔問歌の詠歌場面が服喪中であること、現世の人間同士の贈答歌であることを踏まえると、死を悼む和歌が死・死者と距離を置くようになることと弔問歌の形成とは軌を一にしているのではないだろうか。そこで本稿では、挽歌・哀傷歌といった部立に所収されていない和歌をも含めて検討対象とすることで、弔問歌の形成過程について探っていきたい。

一、死を悼む和歌の贈答

『万葉集』のように長大で、巻によって編纂時期が異なる歌集の場合には、部立にも統一性がみられない。そのため、挽歌が三大部立のひとつであるとはいえ、挽歌の部立がない巻や、部立がなされていない巻もある。挽歌の部立は『万葉集』巻二・三・七・九・十三・十四にみられる。こうした巻以外にも、実は『万葉集』には死を悼む和歌が所収されている。

その一つが雑歌の部立である。『万葉集』巻五の雑歌には、大伴旅人の歌（七九三）、山上憶良の日本挽歌（七九四～七九九）といった死を悼む和歌が収められている。さらに、巻八の夏雑歌には、石上堅魚の歌（一四七二）とそれに唱和した旅人の歌（一四七三）、巻十六の有由縁雑歌には妻子（あるいは憶良による代作）が詠んだという伝承を

もつ死を悼む和歌（三八六四）がみられる。

もう一つが末四巻である。末四巻とは、『万葉集』の巻十七・十八・十九・二十の総称であり、部立はなされておらず、大伴家持による歌日記的な性格がみられるものである。『万葉集』のなかでも比較的新しい時代の和歌が所収されているのが末四巻であり、巻十七の家持による歌（三九五七～三六五九）、巻十九の家持による歌（四二一四～四二一六）と詠み人知らずの伝承歌（四二三六・四二三七）、巻二十の円方女王による伝承歌（四四七七）と藤原夫人による伝承歌（四四七九・四四八〇）といった歌人による死を悼む和歌が収められている。そのなかには、つぎのような歌がみられる。

資料　一『万葉集』巻十九（四二一四～四二一六）

挽歌一首［幷せて短歌］

天地の　初めの時ゆ　うつそみの　八十伴の男は　大君に　まつろふものと　定まれる　官にしあれば　大君の命畏み　鄙離る　国を治むと　あしひきの　山川へなり　風雲に　言は通へど　直に逢はず　日の重なれば　思ひ恋ひ　息づき居るに　玉桙の　道来る人の　伝て言に　我れに語らく　はしきよし君はこのころ　うらさびて　嘆かひます　世間の　憂けく辛けく　咲く花も　時にうつろふ　うつせみも　常なくありけり　たらちねの　御母の命　何しかも　時しはあらむを　まそ鏡　見れども飽かず　玉の緒の　惜しき盛りに　立つ霧の　失せぬごとく　置く露の　消ぬるがごとく　玉藻なす　靡き臥い伏し　行く水の　留めかねてきと　たはことか　人の言ひつる　およづれか　人の告げつる　梓弓　爪引く夜音の　遠音にも　聞けば悲しみ　にはたづみ　流るる涙　留めかねつも

反歌二首

遠音にも君が嘆くと　聞きつれば　哭のみし泣かゆ　相思ふ我れは

世間の　常なきことは　知るらむを　心尽すな　ますらをにして

右は、大伴宿禰家持、聟の南の右大臣家の藤原二郎が慈母を喪ふ患へを弔ふ［五月の二十七日］

この挽歌一首と反歌二首は、天平勝宝二年（七五〇）五月二七日、家持の娘婿にあたり、藤原南家で右大臣家の次男である藤原二郎が母を亡くしたため、その悲しみを弔って家持が詠んだものである。当時、家持は越中に赴任しており、伝言によって二郎の母の死を知った様子が和歌からわかる。

挽歌一首の歌意はつぎの通り。天地が初めて開けたときから、世の中の多くの男は官人となり大君（天皇）に仕えるものと決まっています。そのため大君の勅命を受けて都を離れて越中を治めようと、山や川を超えてきました。しかし風や雲に噂は聞けど、直接お会い

することができないまま、日を重ねるので恋しく思い、ため息をついていると、玉梓の道からやってきた人が伝言して私に言うことには、君（藤原二郎）は近頃落ち込んで嘆いています。世の中が厭わしくて辛いのは、咲く花も時が経てば散り、人の身も常ではありません。たらちねのお母様は何のつもりなのか、別の時があるでしょうに、見ても見飽きず、惜しい盛りのお年なのに、立ち霧が消えてしまったかのように、置く露が消えてしまったかのように、玉藻のようになびいて伏されて、流水のように留め置くことができませんでした、とのことです。この人は狂言を言ったのでしょうか、それとも迷い言でしょうか。梓弓を爪でかきひく夜の音のように、遠くからの知らせとはいえ悲しく、流れる涙を留めることができません。

反歌の一首目は、挽歌一首の「遠音にも 聞けば悲しみ にはたづみ 流るる涙 留めかねつも」という表現を受けて、遠くからの知らせであっても、君（藤原二郎）が嘆き悲しんでいると聞きましたので、同じ思いでいる私も泣き悲しんでいます、と詠んでいる。二首目は、「世間の 憂けく辛けく 咲く花も 時にうつろふ うつせみも 常なくありけり」という表現を受け、世の中が常ではないということは知っていますが、君（藤原二郎）は立派な男なので心尽きるまで嘆かれませんように、と詠んでいる。

このように、挽歌一首は二郎の嘆きを知った経緯と、それを受けた自らの悲しみが詠まれている。その表現を受けた反歌では、一首目は弔問する相手の悲しみに同調し、二首目は相手の悲しみを慰めている。こうした現世の人同士で対等に悲しみを分かち合う贈答歌は、『万葉集』挽歌の部立に所収されている和歌にみられない。ただし、唯一の例外としてつぎのような歌のやりとりがある。

資料 二『万葉集』巻三・挽歌（四六三）

十一年己卯。夏六月に、大伴宿祢家持の亡りし妾を悲傷びて作れる歌一首

今よりは 秋風寒く 吹きなむを いかにかひとり 長き夜を寝む

弟大伴宿祢書持の即ち和へたる歌一首

長き夜を ひとりや寝むと 君が言へば 過ぎにし人の 思ほゆらくに

これは天平一一年（七三九）六月、家持が亡くなった妾に対する悲嘆の思いを詠んだ歌と、それにこたえた書持の歌である。家持が、今よりもより一層秋風が寒く吹くというのに、どうして一人で長い夜を寝ようか、と詠むのに対して書持が、長い夜をひとりで寝ると君（家持）がいうと、また亡くなった人（妾）のことが思われます、という歌を詠んでいる。

ここにみえる「君」は贈答相手である兄・家持のことであり、相手の悲しみに同調して死者を偲ぶ感情が表現されている点で資料一

の反歌一首目に共通するものがある。

資料一・二はいずれも贈答相手の悲しみを聞き、自らのそれとして受け止めるものである。親しい人とのやり取りのなかで生まれた表現といえるだろう。ただし、これは『万葉集』にみえる死に関わる贈答歌のすべてにいえるわけではない。それはつぎのような和歌がみられることからもわかる。

資料　三『万葉集』巻五・雑歌（七九三）

大宰帥大伴卿、凶問に報ふる歌一首

禍故重畳、凶問累集。永懐二崩心之悲一、独流二断腸之泣一。但依二両者大助一、傾命纔継耳［筆不レ尽レ言、古今所レ歎］。

世間は　空しきものと　知る時し　いよよますます　悲しかりけり

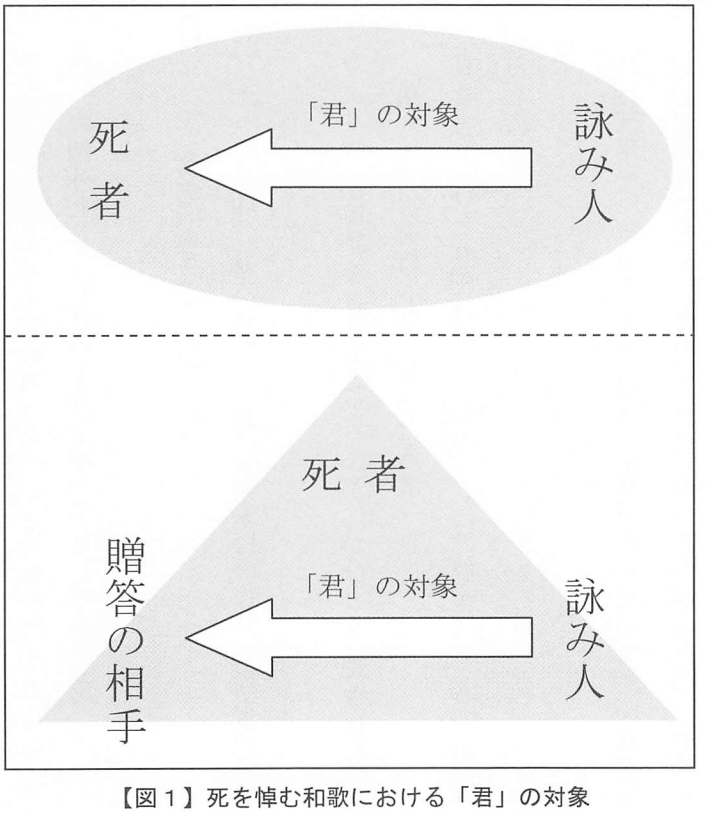
神亀五年六月二十三日

大伴旅人は、神亀四年（七二七）に大宰帥として筑紫に赴任していた。赴任中の神亀五年（七二八）、都からの凶報（おそらく都に残した身内の死）を受けて詠作したのが、この漢文による前文と和歌とである。

前文の意味はつぎの通り。不幸が重なり、悪い知らせが続いています。永く崩心の悲しみに沈み、ひとり断腸の涙を流しています。ただ、お二人（凶報を伝えた人）の大いなる助けによって、わずかながらの命をつなぎとめております。

そして和歌は、この世の中がむなしいものであると知るたびに、いっそう哀しくなってしまうものです、という意味になる。

このように、死の知らせを受けた贈答歌であるものの、その内容は旅人の独詠歌であり、無常観のなかで歌が完結している。都から凶報を伝えた人物、すなわち贈答の相手とともに悲しみを分かち合い、その悲しみを弔うということはしていないのである。



【図１】死を悼む和歌における「君」の対象

それに対して、弔問歌はまず死者があり、それを弔問するものとされるものとの三者の世界のなかで構成される（図1を参照）。自らの悲しみと受け止めることで和歌を贈る相手に同調しその心を慰めるのである。こうした点を踏まえるならば、天平一一年（七三九）に詠まれた書持による和歌（資料一）と天平勝宝二年（七五〇）に詠まれた家持による和歌（資料二）と弔問歌の嚆矢として位置付けることができるのではないだろうか。弔問歌としての要素を伴った死を悼む歌の贈答が大伴家持の周辺で交わされていた事実を『万葉集』によって知ることができるのである。

以上のように、弔問歌はこれまで研究対象となされてこなかったが、死を悼む和歌を通覧してみると八世紀半ばに詠まれた歌にはわずかに弔問歌としての要素が見受けられるのである。とくに贈答相手を指す「君」という語は、弔問歌を考えるうえで注目できよう。

二、『万葉集』にみる「君」の用法

前述のように、「君」という語の用法に着目することが弔問歌の検討に有効であることがわかった。そのため『万葉集』の死を悼む和歌における「君」の用法について調査を行い、検討を加えてみたい。

かつて、上代における「君」は女性が男性を指していう語とする認識が主流であった。それに対して、水島義治氏は『万葉集』における「君」の用法を網羅的に検討し、たしかに女性が男性を指して「君」という例が多いものの、反対に男性が女性を指していう事例も存することを明確にされた(三)。

本稿もその成果を踏まえて、「君」が必ずしも女性が男性を指していう表現ではないことを念頭に置きながら、『万葉集』の死を悼む和歌にみえる「君」の用例調査にあたった。その結果、「君」の語を八三例、うち「大君」という表現が二七例あることを確認したのである。

詳細をみていく。八三例ある「君」のなかで死者を指す場合が七四例あり大多数を占めている。それは、例えばつぎのように死者と詠み人との一対一の世界で成り立っている場合である。

資料 四『万葉集』巻二・挽歌（一六三・一六四）

大津皇子の薨ぜし後に、大伯皇女、伊勢の斎宮より京に上る時に作らす歌二首

神風の 伊勢の国にも あらましを 何しか来けむ 君のあらなくに

見まく欲り 我がする君も あらなくに 何しか来けむ 馬疲るるに

この二首は、大津皇子が亡くなった後に、斎宮であった姉・大伯皇女が都へ帰るさいに詠んだ和歌である。一首目は、伊勢にいたほうが良かったものを、何をしに都へ帰るのであろうか、弟である大

津皇子がいないのに、という歌意である。二首目は、あれほど会いたいと私が思っていた弟もいないのに、何をしに帰るのだろう、馬が疲れるのに、という歌意になる。このように、詠み人である大伯皇女が死者である大津皇子へ呼びかけるという構造になっている。とくに注目したいのは、「君」（傍線部）という語であり、死者である大津皇子を指していることが明瞭である。

そのほかには「大君の命畏み」という表現が三例（巻三-四四一・四四三、巻十三-三三三三）あり、これは死者・遺族いずれをも指さない「君」の用例にあたる。のこる六例はつぎのとおりである（四角で囲った部分が該当箇所）。

資料　五『万葉集』巻二・挽歌（一九六）

明日香皇女の木瓮の殯宮の時に、柿本朝臣人麿の作れる歌一首［并せて短歌］

①飛鳥の　明日香の河の　上つ瀬に　石橋渡し［一に云う、石なみ］
下つ瀬に　打橋渡す　石橋に［一に云う、石なみに］　生ひ靡ける
玉藻もぞ　絶ゆれば生ふる　打橋に　生ひをれる　川藻もぞ
枯るればはゆる　②何しかも　わご大君の　立たせば　玉藻のも
ころ　臥せば　川藻の如く　靡かひし　宜しき君が　朝宮を
忘れ給ふや　夕宮を　背き給ふや　③うつそみと　思ひし時　春
べは　花折りかざし　秋立てば　黄葉かざし　敷栲の　袖たづ
さはり　鏡なす　見れども飽かず　望月の　いや愛づらしみ
思ほしし　君と時々　幸して　遊び給ひし　御食向ふ　城上
の宮を　常宮と　定め給ひて　あぢさはふ　目言も絶えぬ　④然
れかも［一に云う、そこをしも］　あやに悲しみ　ぬえ鳥の　片恋
嬬［一に云う、しっつ］　朝鳥の［一に云う、朝霧の］　通はす君が
夏草の　思ひ萎えて　夕星の　か行きかく行き　大船の　たゆ
たふ見れば　慰もる情もあらず　⑤そこ故に　せむすべ知れや
音のみも　名のみも絶えず　天地の　いや遠長く　思ひ行かむ
み名に懸かせる　明日香河　万代までに　愛しきやし　わご大
君の　形見かここを

資料　一一『万葉集』巻三・挽歌（四六三）

（既述のため割愛）

資料　一『万葉集』巻十九（四二一四～四二一六）

（既述のため割愛）

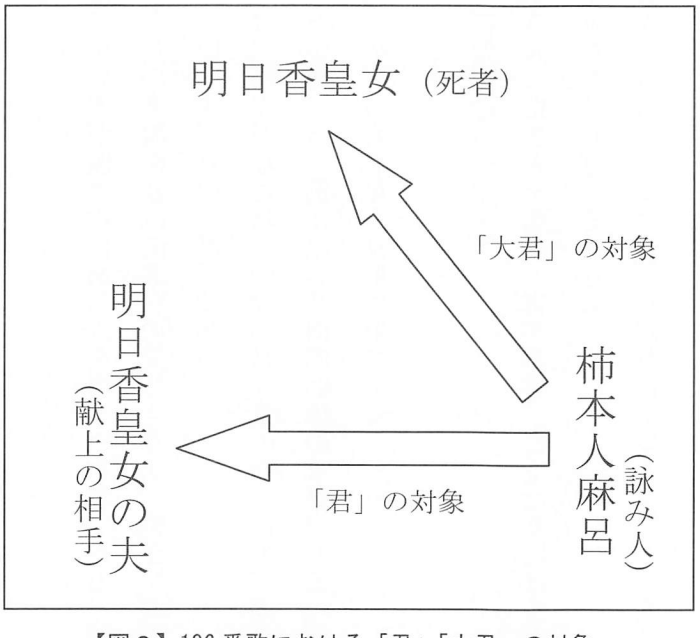
このように七例のうち、三例は柿本人麻呂が詠んだ歌に、三例は大伴家持の周辺で詠まれた歌にみられる。しかも前者は一九六番歌（資料五）に集中してみられるのである。

資料五の内容は大きく五つに分けることができる。①の十四句で

は、明日香川の上流には石橋をわたし下流には板の打橋をわたす。石橋に生える美しい藻はなくなればまた生え、板の打橋に生える藻も枯れればまた生える、というように明日香川に生える藻の生命力をたたえる。②の一二句では、それなのに大君（明日香皇女）は、立てば玉藻のように臥して、川藻もようになびいて仲の良かった君（夫）との朝宮をどうして忘れてしまわれたのか、どうして夕宮を見捨ててしまわれたのか、と明日香皇女の無情な死を恨む。③の二二句では、この世の人と思っていたときには、四季折々に仲睦まじく君（夫）と遊ばれていた城上の宮を永遠の宮とお決めになられて、もはやお会いすることもできなくなってしまった、と明日香皇女の生前と死後との対比を詠んでいる。④の一四句では、そのためとても悲しみ、ぬえ鳥のように片思いとして、朝鳥のようにお通いになられている君（夫）が、夏草のように萎れて、星が移り行き大船が揺れ動くような様子をみれば、私の心も慰める気持ちがわかなくなってしまう、と残された君が嘆く姿を詠む。⑤の一三句では、そのためにはどんな方法があるのかさえ知らないが、せめて名前だけでも絶えることなく永遠に偲んでいくしかない。明日香皇女と同じ名前の明日香川は大君（明日香皇女）の形見なのだろうから、と結ぶ。

このように、資料五にみえる「君」の対象は資料一・二と同様に死者ではなく、おそらくは柿本人麻呂が歌を献上したであろう明日香皇女の夫を指すものであることがわかる（四）。しかも、死者である明日香皇女のことを「大君」（波線部）としていることから、明確な区別が意識されている。

以上のように、『万葉集』の死を悼む歌にみえる「君」の用法を見てきたところ、その対象となる人物は二つに分類されることがわかった。ひとつは死者を指す場合であり、もうひとつは歌を贈る相手を指す場合である（図1を参照）。前者は死者と詠み人という二者の世界で構成されているのに対して、後者には死者と詠み人に加え



【図２】196 番歌における「君」「大君」の対象

「君」の対象者が登場する。そのため、詠み人と死者との間に距離が生じることとなったと考えられる。

ただし、「君」の対象者と詠み人との関係において、資料一・二と資料五とでは違いがみられる。それは、資料五では「君」の嘆く姿に主眼が置かれており、詠み人の心情としてはわずかに「慰もる　情もあらず」（傍線部）と詠むに留まる点である（五）。むしろ、資料五には歌を献上する相手である「君」だけではなく、死者である「大君」も登場しており、前述した二種類の用法を併せ持っていると評価することができるのではないだろうか（図2を参照）。

以上のような点から、資料五は資料一・二にみられる「君」に通じる用法が使用されているものの、弔問歌とは位置づけがたいと考えられる。

三、弔問歌形成の和歌史的背景

死を悼む和歌において、「君」という用語が死者ではなく贈答の相手を指すことは、平安時代の和歌集にもみることができる。例えば、哀傷歌の部立に所収されている和歌では、つぎのようなものがある。

資料　六『古今和歌集』巻十六・哀傷歌（一六二）

喪に侍りけるを弔ひにまかりてよめる　　ただみね

墨染の　君が袂は　雲なれや　絶えず涙の　雨とのみ降る

これは壬生忠岑が服喪中にある人を弔った和歌である。墨染め色をしたあなたの喪服の袂は雨雲なのでしょうか、絶えず涙が雨のように降っています、という歌意である。

あるいは、部立がなされていない私家集のなかにも、同様の和歌をみることができる。例えば、凡河内躬恒の家集である『躬恒集』には、つぎのような和歌が所収されている。

資料　七『躬恒集』（二六五）

ある人に亡き人を恋ひて寄する歌、亡くなりにける妻を恋ひて歌をおくれり、その返しに

亡きをこそ　君は恋ふらめ　年経れば　あるも悲しき　ものにざりける

これは、亡くなった妻を恋しのんで詠んだ和歌が贈られてきたため、その返歌として躬恒が詠んだ和歌である。歌意は、亡くなった妻を今でもあなたは恋い慕っているようですが、年月が経って歳をとると、生き残っている者も悲しいことだと思いますよ、となる。

このように、『万葉集』と同様に贈答相手を指す語として「君」を用いる和歌は平安時代にもみることができる。ただし、平安時代の

死を悼む和歌もすべてが「君」を贈答相手の意で用いていたわけではない。例えば『古今和歌集』哀傷歌には「血の涙 落ちてぞたぎつ白川は 君が世までの 名にこそありけれ」（素性法師・八三〇）や、「郭公 今朝鳴く声に おどろけば 君を別れし 時にぞありける」（紀貫之・八四九）といった和歌があり、これらの「君」はいずれも死者を意味していることは明白である。

とはいえ、和歌において死者へ呼びかけるのではなく、対等な立場で悲しみを分かち合うことで相手の悲しみを慰めるという手法が平安時代以降に定着するのもまた事実である。それは、和歌を贈る相手を「君」と呼びかける手法が贈答歌ではごく一般的なものであったためと考えられる。

『万葉集』から『古今和歌集』にかけて展開する贈答歌について鈴木日出男氏は、「『古今集』読人知らず歌も『古今六帖』所出不明歌も、圧倒的に恋歌が多いのである。そして、この恋の歌という点が重要とみられるのは、『万葉集』以来の相聞贈答性という伝統を継承しているとみられるからであり、そのことを通して和歌が通達の具としての役割を担っていたと考えられるからである」としたうえで、「万葉後期からしだいに和歌は、自己表出の具であるよりも、人間連帯の具として社会化する面を強めていたようにみられる」と指摘している（六）。鈴木氏の論点は恋歌（相聞歌）であるが、挽歌には恋歌的発想とその用語が多用される傾向にあることは周知のことであろう（七）。すなわち、挽歌にも相聞歌のような贈答性が本質的に備わっていると考えられるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、これまでほとんど検討の対象となされてこなかった弔問歌の形成について、「君」の用法に着目しながら考察してきた。ここで改めて整理しておきたい。

『万葉集』の死を悼む歌における「君」の用例を通覧したところ、死者を指す場合と歌を贈る相手を指す場合とに大別できることがわかった。大半は前者に当てはまり、後者は柿本人麻呂が詠んだ歌（資料五）と大伴家持の周辺で詠まれた歌（資料一・二）とにかたよってみられた。ただし、同様の用法であっても、柿本人麻呂が詠んだ歌（資料五）と大伴家持の周辺で詠まれた歌（資料一・二）とでは違いがみられる。それは、柿本人麻呂が詠んだ歌が「君」の嘆く姿に主眼が置かれている点。死者である「大君」も登場することで二種類の用法を併せ持っているという点である。

弔問歌とは、死者と弔問するものとされるものとの三者の世界のなかで構成され、詠み人がその死を自らの悲しみとして受け止めることで和歌を贈る相手に同調しその心を慰めるといった性質のものである。この点を踏まえるならば、大伴家持の周辺で詠まれた歌（資

料一・二）を弔問歌の嚆矢として位置付けることができると考えられる。

死に直面した遺族に対して弔問を行うことは通時代的にみられることである。たとえば、『古事記』（上つ巻）には天若日子の死を嘆き悲しむ父や妻子に対して阿遲志貴高日子根が「我は愛しき友なれこそ弔ひ来つれ」と言う場面がある。このことからも古くから弔意を示すことが行われていたことがわかる。ただし、弔問歌のやり取りをする場の形成は奈良時代まで待たなければならないだろう。それは贈答歌が奈良時代以降の人々のコミュニケーションツールとして確立することと軌を一にしていると考えるためである。

注

（一）拙稿「古代における死を悼む和歌の展開―挽歌と哀傷歌の比較検討を通して―」（『万葉古代学研究所年報』十、二〇一二年）。

（二）倉田実「夕霧の落葉宮邸訪問の作法―弔問から求婚へ―」（『大妻国文』三八、二〇〇七年）。

（三）水島義治「「からまる君を別れか行かむ」の歌の解―万葉集における「君」の意味・用法―」（犬養孝博士米寿記念論集『万葉の風土・文学』塙書房、一九九五年）。

（四）明日香皇女の夫については忍壁皇子に比定される場合が多いが、明日香皇女と忍壁皇子との婚姻関係を明確に裏付ける資料に欠けるため、本稿では単に「夫」として議論を進めたい。

（五）資料一・二と資料五との違いについては、相手と対等な立場でやり取りしたものか、献上するために詠作したものか、という詠み人の立場も加味しなければならないと考えられる。

（六）鈴木日出男「万葉歌の伝承」（『古代和歌史論』東京大学出版会、一九九〇年）三六六頁。

（七）青木生子『万葉挽歌論』おうふう、一九九八年に代表される一連の研究。